

「弱さ」の承認論に向けて

東京大学大学院／日本学術振興会 井口尚樹

1 目的

本発表の目的は、アクセル・ホネットによる承認論に対し、「強さ」への承認と「弱さ」への承認という区分を導入し、それをういた新たな批判の可能性を示すことである。

フランクフルト学派第三世代の旗手と目されるホネットは、ヘーゲルに着想がみられる承認論を再構成することで、社会的コンフリクトの（生存競争としての側面に回収されない）道徳的側面を説明するとともに、正当な社会の基準についても、相互承認の実現という観点から独自の議論を展開している。

ホネットは承認の形式を、愛、法、連帯の3つに区分し、それぞれにおける承認欠如を問題とするが、中でも論争の焦点となってきたのは連帯の承認形式である。連帯とは、個々人の個別性を、共同体の価値に対する貢献という観点で適切に評価しあう、という承認形式である。確かにこれは、承認欠如による社会的コンフリクトの動機づけの説明には有用である。

他方で、実現の程度をどのように評価し、現実の社会に対する批判を展開できるのかについての説明は明瞭とは言い難い。ナンシー・フレイザーは、社会的評価に基づく承認が誰にも認められる権利であるという主張は評価の概念を無意味なものにするとして、各人の承認による自己実現を正当な社会の条件とすることはできないと批判している（2003=2012: 38-9）。本発表では、連帯の実現をはかる基準の明確化と、それをういた社会批判の可能性の提示を目的とする。

2 方法

連帯概念の不明瞭さにつながっているのは、「共同体の価値への貢献」の不明確さである。しかし分析者が価値の内容を設定してしまうならば、それはあくまで党派的な主張にすぎなくなる。本発表では価値の内容を定めずに、「強さ」への承認と「弱さ」への承認という形式的区分を提起する。なお「弱さ」への承認の内実をより明確にするために、社会的弱者とされる人々についての事例研究を参照する。

3 結果

「強さ」への承認とは、特定の状況や社会で主流の狭くとらえられた価値への貢献に対する承認である。対して「弱さ」への承認は、当該状況あるいは社会で価値に貢献しない／マイナスに作用するとされている特徴を承認するあり方である。その仕方としては、「貢献」の相対化と、免責が考えられる。前者について「強さ」「弱さ」の承認の区分が表現するのは、当該状況あるいは社会の参加者にとって、「貢献」が狭く、かつ固定化（／相対化）して認識されている程度である。「弱さ」への承認が欠ける程度に応じて、社会的評価は一部の者しか受けられない希少財となりやすく、それをめぐる奪い合い、得られない者の否定的自己レイベリング、そして「貢献しない」者に対する非難に表される、相互的な承認欠如が生じやすくなる。（自他の）「弱さ」への承認は、連帯の形式での相互承認にとって、「強さ」への承認と同様に重要な要素である。「強さ」への承認が優勢となり「弱さ」への承認が失われている状況・社会と、「弱さ」への承認がなされている状況・社会とを区別できるようになる点に、新しい区分を導入する意義はある。

Honneth, A., 2003, *Kampf um Anerkennung; Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte, Mit einem neuen Nachwort*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2014, 山本啓・直江清隆訳『承認をめぐる闘争〔増補版〕—社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)

Fraser, N. & A. Honneth, 2003, *Umverteilung oder Anerkennung?*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2012, 加藤泰史監訳・高畑祐人・菊池夏野・舟場保之・中村修一・遠藤寿一・直江清隆訳『再配分か承認か?—政治・哲学論争』法政大学出版局.)